夢想の研究

Studies in Fantasy

活字と映像の想像力

瀬戸川猛資

Takeshi Setogawa

夢想の研究

Studies in Fantasy

活字と映像の想像力

瀬戸川猛資

Takeshi Setogawa

早川書房

〈検印廃止〉

夢想の研究

一九九三年二月二十日　印刷
一九九三年二月二十八日　発行

著　者　瀬戸川猛資（せとがわたけし）

発行者　早川　浩
発行所　早川書房
東京都千代田区神田多町二ー二
電話　東京　三二五二ー三一一一（大代表）
振替　東京・六ー四七七九九
印刷所　中央精版印刷株式会社
製本所　中央精版印刷株式会社
定価はカバーに表示してあります
Printed and bound in Japan

ISBN4-15-203552-8 C0095

夢想の研究

――活字と映像の想像力――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

めったに見られない夢を見たよ。人間の知恵では
およびもつかぬ夢だよ。この夢を解釈しようなど
というやつは、それこそ大バカ者だね。

シェイクスピア『夏の夜の夢』第四幕第一場

目次

まえがき 9
1 謎解き——男だけの世界 15
2 わたしは悪魔 24
3 帝王伝説 32
4 聖域へ 40
5 ビデオ雑記帳から 48
6 獅子王変化 57
7 大君の都 66
8 夢のなかの生涯 75
9 異なる文化 83

10 センス・オブ・ワンダー 91
11 破滅の愉しみ 99
12 天空の人びと 108
13 からくり兎(うさぎ) 116
14 些細な事柄 124
15 硝子玉とコルク玉 132
16 もうひとつの顔 141
17 月の山脈 148
18 裏切る現実 156
19 或るコンプレックス 164
20 幻の国 172
21 太古の祭り 180
22 彼方の物語 188

23 灯台もと暗し 197
24 霧のなかの群衆 205
25 問題作の作り方 215
26 東の風 223
27 地球をめぐる風 230
28 本の燃える日 239
索引 262

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえがき

アーサー・コナン・ドイルが一九一二年に発表した長篇小説『失われた世界』は、今日でも世界中で親しまれているＳＦ冒険小説の古典だが、その巻頭に次のような奇妙な文句が記されていることは意外に知られていない。

I have wrought my simple plan
　If I give one hour of joy
To the boy, who's half a man,
　Or the man who's half a boy.

（半ぶん大人の少年か
半ぶん少年の大人が

ひとときなりとも楽しめればと
下手な趣向を凝らした次第）

知られていないのも道理で、この巻頭句は現在の角川文庫版と創元推理文庫版では削除されてしまっているのである。余計なものと見なされ翻訳されなかったのだろうが、なかなかどうして味のある文句ではないか。とくに後半の二節、「ハーフ・ア・マン」「ハーフ・ア・ボーイ」という繰り返しがとてもいい。

わが国の作家・江戸川乱歩にも、これによく似た趣旨の文章がある。昭和十一年に書かれた随筆『活字と僕と』の末尾の部分である。

誰の心にも二人の人間が住んでいるように、僕の心にもハッキリと二人の別人が住んでいる。その一人はいつまでも少年で、いつまでも純粋で、ただ遥かなる夢をのみ追っている冥想家で、そして、夢幻の国への美しい懸け橋として活字の非現実性を恋するものは彼である。もう一人は世渡りというものを心得て、商才があって、如才がなくて、功利のゆえにみずから低くする人間界の弱者で、そして、活字の非現実性を傷つけそれを生活に結びつけようとするものは彼である。

要するに乱歩は、自分は半ぶん大人の少年である、と述べているわけだ。
コナン・ドイルと江戸川乱歩といえば、東西の探偵小説の完成者であり、幻想怪奇小説の名手でも

ある。さらに空想科学小説も大好きで、その発展に大きく寄与したことでも知られている。
その二人が揃って、同じ心情を吐露しているところがおもしろい。右の三つの小説ジャンルは今日でこそミステリ、ホラー、SFとして大隆盛を誇っているけれど、かつてはその「半ぶん大人」的想像力のゆえに、完全な大人たちから「子供っぽい」「バカバカしい」とさんざん嗤われていたものなのだ。ドイルと乱歩の文章は、そういう時代風潮に対する一種の居なおり宣言だったのである。

想像力は文学の重要な研究課題だが、こうした「半ぶん大人」「半ぶん少年」の想像力はあまりまともに論じられたことがない。いちど俎上にのせてみたいものだ。
ミステリやSFや幻想小説の熱心な読者だったわたしは、かなり以前からそんな願望を抱いていたのだが、いかんせん機会がつかめなかった。一九八八年の夏、《ミステリマガジン》の菅野圀彦編集長から「何か連載を」との申し出があったのをさいわい、はりきって構想を練りはじめたが、いざ筆を執る段になってみるとどうもうまくいかない。何かいい知恵はないものかと考えあぐねているうちに、ふと思い浮かんだのが、活字メディアと映像メディアの作品を同時に論じるという方法である。
さきに引用した江戸川乱歩の文章は、活字のもつ非現実性について書かれたものだが、非現実の夢の世界へとわれわれを誘う(いざな)のは活字ばかりではない。映像もまたそうである。いや、「活字ばなれ」の進行する現代では、映像のほうがより一般的であるとさえ言えるかもしれない。
映像メディアは近年急速な勢いで活字メディアに接近しつつある。映像機器のめざましい発達で、一般家庭にビデオ・デッキやレーザー・ディスクが浸透、映画はソフトウェア化されて量産されるよ

うになり、五十年以上も昔の古典的名作から半年前に封切られたばかりの新作までが、誰でも手軽に楽しめるようになった。コレクターが登場し、ビデオ書斎が出現するに至ったのだから、ほとんど書物の世界と変わりがない。実際、書店では本と映画が一緒に売られているのである。

こうした時代状況を考え合わせ、本と映画を中心に、二つのメディアの想像力をクロスオーバーさせてみてはどうだろう。映像メディアは「半ぶん大人」的想像力にはめっぽう強い。活字メディアでは見えなかった部分が照らし出されるのではないか。

これはなかなかの名案に思えたので、さっそく実行に移すことにし、『夢想の研究』という通しタイトルを考え出した。随分と大げさな題名だが、乱歩の文章中の〈夢幻の国への美しい懸け橋〉という一節とコナン・ドイルの最初の長篇小説の題名『緋色の研究』とをまぜ合わせたつもりである。

執筆にあたっては、次の三つの点を心がけた。

★毎回、本と映画から具体例を示してその夢想を論じ、一つの主題を浮かびあがらせること
★あくまでも現実との関わりにおいて夢想をとらえること
★テーマがテーマだけに、大胆に想像力をめぐらすこと

連載は一九八九年一月号からはじまり、途中三回の休載をはさんで、一九九一年九月号に終了した。その間、数多くの本を読み、映画を観たが、この二つをうまく結びつけるのは、やってみると意外にむずかしい。全体がどちらか一方の話に終始してしまうことも何度かあった。結果として、文芸評論

とも映画評論ともビデオ・エッセーともつかぬ得体の知れない読み物が出来あがったが、著者としてはその得体の知れないところに多少の自信を抱いている。こういうものはまず類似品がないだろうと思っているのである。

本書はそれらをまとめて一冊としたものだが、あらためて読み返してみると不満な点が多く、大幅に改稿したい誘惑にかられる。が、いったん発表してしまったものは仕方がないとやみくもに割りきり、修正箇所は最小限にとどめた。ただし、連載第一回の『大統領夫人に乾杯!』は現在では〝時季はずれ〟の感が甚だしく、プロローグとしても具合が悪いので、いまお読み頂いているこの文章と差し替えた。

雑誌連載中は早川書房《ミステリマガジン》編集部の木田康則さん、竹内祐一さんのお世話になり、単行本化にあたっては同じく編集部の村上和久さんのお世話になった。《ミステリマガジン》編集長の菅野圀彦さんには最初から最後までお世話になりっぱなしで恐縮している。独特の画風で知られる方緒良さんには表紙イラストを描いて頂いた。皆さん、ありがとうございました。また連載中は幸いにも好評で、何人もの読者の方から編集部あてにお便りを頂いた。大宮の柴田和夫さんからは、第23章「灯台もと暗し」に関連した資料まで頂戴した。書く側としては、それらがどれだけ励みになったか知れない。この場を借りてお礼を申しあげます。

平成四年　師走

瀬戸川猛資

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com